

乳児閉塞型黄疸におけるサイトメガロウイルス感染の意義

都立駒込病院感染症科 南 谷 幹 夫
村 岡 良 昭

新生児ないし乳児肝疾患とサイトメガロウイルス (CMV) との関連については、すでに若干の報告がみられ、また私たちも CMV の疫学や CMV による乳児肝

炎の経験から考察を加えてきた。乳児閉塞型黄疸として取上げた場合、先天性胆道閉塞症、肝炎、特発性総胆管拡張症、家族性胆汁うっ滞症など種々の病型があるが、

Table 1 CMV Isolation and congenital biliary atresia

Case	Sex	Age	Diagnosis	Material	CMV		
					Isolation	CF-titer	
1	K. T.	M	2m	CBA	Urine	⊕ (7 d.)	<1 : 4 1 : 8
						+(14 d.)	
2	T. O.	M	2m	CBA	"	-(21 d.)	
3	K. K.	M	2m	CBA	"	+(18 d.)	
4	M. S.	F	1 y 6m	CBA	"	-(21 d.)	
5	R. F.	M	2m	CBA	"	-(21 d.)	
						6m	
6	U. I.	F	2m	CBA	"	-(21 d.)	
7	K. K.	M	3m	CBA	"	-(21 d.)	
8	S. N.	F	2m	Choled. cyste	"	12 pfu/ml(14d.)	
healthy children 99 cases (2~5 y. o.)		CMV pfu/ml				CFT	
		100≤	<100~10<	≤10	—		
		0	2(2.0%)	9(9.1%)	88(88.9%)		
						1 : 13	

Table 2 CMV. Isolation and Hepatitis

Case	Sex	Age	Diagnosis	Material	CMV		
					Isolation	CF-titer	
1	D. K.	M	2m	Hepatitis	Urine	⊕ (5 d.)	1 : 32 1 : 256≤ 1 : 64 <1 : 4 1 : 64
						+(7 d.)	
2	H. M.	M	1m	Hepatitis	"	⊕ (5 d.)	
			2m	Premature	"	⊕ (3 d.)	
3	S. K.	M	2m	Hepatospm	"	300pfu/ml(7d.)	
			6m	Histiocytosis	"	500 " (3d.)	
4	M. K.	F	2m	Hepatitis	"	100 " (6d.)	
5	R. K.	F	2m	Hepatitis	"	— (21d.)	
6	S. H.	M	2m	Hepatitis	"	—	
			3m		"	20pfu/ml(21d.)	
			4m		"	22 " (21d.)	

特に注目されるものは先天性胆道閉鎖症と肝炎であることは論をまたない。乳児肝炎の原因としてCMVのほか、HBウイルス、風疹ウイルス、ヘルペスウイルスなどが知られ、胆道閉鎖症との関連が疑われてきたCMVについては、むしろ否定的成績を得てきた。

ここでは昨年にひきつづき、主として先天性胆道閉鎖症と乳児肝炎をとりあげ、健康小児を対照として、CMVを半定量～定量的に分離し、これら肝疾患におけるCMV感染の意義を追及する。さらに生後4カ月より9カ月まで追跡し得た乳児CMV肝炎の検査経過について述べる。

ウイルス分離材料並びに方法：患者より新鮮尿を得て、定処理後の一定量をヒト胎児肺細胞(HEL)の5～15代継代培養小角ビンに接種してウイルス分離を行い、陽性の場合にはブラック数を数えた。

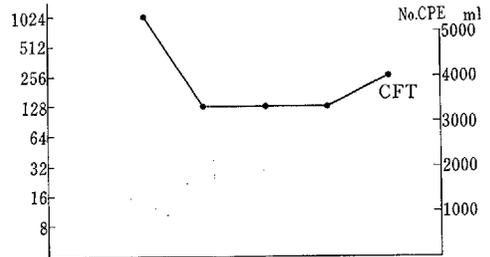
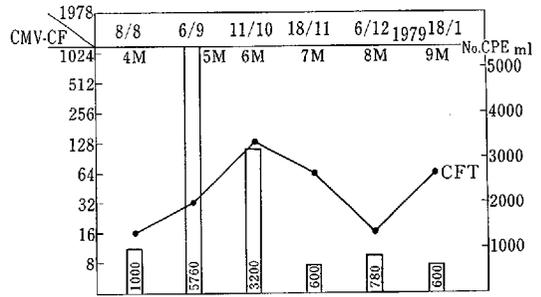
成績

1. 先天性胆道閉鎖症(CBA)7例より新鮮尿9検体を採取しウイルス分離を行なったところ、2例3検体よりCMVを分離した(表1)。症例1は2カ月時に多量のウイルスが排泄されたが、4カ月時には少量の排泄となり、症例3は2カ月時の尿より少量のウイルス排泄があったにすぎない。後述するように多量のウイルスを排泄する症例は原疾患にCMVが関与する可能性が大であるが、少量のウイルス排泄は健康小児からも認められるところであり、CBA7例では1例のみが有意のウイルス排泄を示したと判定した。なお1例の胆管拡張症からは少量のウイルス排泄をみた。対照としてウイルス分離を行なった健康小児99例からは11例が陽性であったが、多いものでも30コであった。

2. 新生児肝炎(NH)6例より新鮮尿11検体を得てウイルス分離を行ない、うち4例については追跡成績を得た。6例中4例では100 pfu/ml以上のウイルス排泄を認め、1例は少量の排泄、1例は陰性であった。追跡成績を得た4例中2例は多量の排泄を続け、1例は急速に減少、1例は持続的少量排泄にとどまった。すなわちNHではCMVの関与するところが大きく6例中4例に認められたが、CMVの関与しないNHも存在する(表2)。

3. 経過を追及した新生児肝炎：妊娠38週で出生(53.4.5)し、生下時体重2,200 gr. 出生直後より全身に散在性の米粒大淡紅色発疹あり肝脾とも1.5 cm 触知。翌日高知市某病院に入院したが、家庭の都合により53.7.22東京K病院へ転院した。この間5月中旬まで37.5～38.0℃が続いたが、体重増加並びに哺乳量は正常、発疹は色素沈着～褪色傾向がみられたが、一部は小出血斑状と

Table 3 N. Y. ♀ 53.4.5.

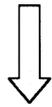


	ToxopIHA	HBsAg	HBsAb	Rubella	WaR	HSV
Patient	128x	—	—	<4x	—	<4x
Mother	32x	—	64x	<4x	—	32x

なり、7月には新しい発疹はみられなくなった。7.22には肝脾腫はそれぞれ3 cm, 5 cmであり、以後次第に縮小してきた。血液像の経過では著変はないが、血液化学検査ではビリルビン値、LDH、LAP、AL-P、GOT、GPTなどに経過中異常高値がみられた。しかし8月に入って、いずれも正常範囲に近づきつつあって、殊に著変がみられたGOT、GPTでは5、6、7月に比べ8月下旬の値はほぼ正常であった。ウイルス学的検査は表3のようで、患児尿中のウイルス排泄量は生後5、6カ月時がそれぞれ5,760 pfu/ml、3,200 pfu/mlと極めて多量であったが、その後は減少し600～800 pfu/mlであった。CMV-CF値は生後6カ月時がピークで1:128であった。母親は高いCMV-CF値を示していたが、尿中にウイルス排泄はみとめられなかった。また患児血清1 gM中にCMV抗体を認めた。

結論

1. 先天性胆道閉鎖症7例にサイトメガロウイルス分離を試みたところ、1例に多量のウイルス排泄がみられた。
2. 新生児肝炎6例よりサイトメガロウイルス分離を行ない、4例に多量のウイルス排泄を認めた。
3. 新生児肝炎の4カ月より9カ月までの間ウイルス排泄量、抗体量を追跡し、臨床検査成績との関連を検討した。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



新生児ないし乳児肝疾患とサイトメガロウイルス(CMV)との関連については、すでに若干の報告がみられ、また私たちも CMV の疫学や CMV による乳児肝炎の経験から考察を加えてきた。